

わが家族の名前について

—父・重森^{みれい}三玲の日記から探るその由来—

【サマリー】

重森^{ばいろん}貝崙

ミレー、カント、コーエン、ユーゴー、ゲーテ、バイロン。ここに記載されているのは周知のように、欧州の哲学者と芸術家の名前であり、歴史上の人物ともいうべき有名人なので、ここに名前を載せたこと自体に特別の意味はない。問題なのは、この名前の全てが日本人の一家の名前となっていることである。すなわち、ミレーは重森三玲という日本庭園研究者・作庭家の名前としておさまっている。

実は、三玲には計夫^{かずお}という父の命名による名前があったのだが、全身芸術志向の三玲にとって、極めて平凡に感じられたらしい。父親が亡くなると、日頃敬愛してやまなかった、フランスの画家・ミレーの名を自ら命名した。この名前はすでに雅号として用いており、これを戸籍名としたのである。生まれてくる子供たちもすべてこの例になった。完途、弘淹、由郷、執氏、貝崙で、由郷は男名前であるが女性である。陰陽五行、漢字の画数にも注意をはらった形跡がある。

四男が生まれたのは昭和十三年（1938年）。バイロンと命名した。初めてのイギリス名である。イギリスとは三年後に戦争状態に入る。それほど世界の状況は陰険だった。しかし三玲はそんな政治情勢など全く眼中になく、平然と仮想敵国有名人の名をつけている。「漢字・字体のすわりがいい」、日記の記述からは、なんとなくそのような理由が読み取れるようである。